



月刊 中東レポート

第9号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03) 291-5533
編集 J. R. A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費20000円

激化する帝国主義・イスラエルの策動

一九八六年二月一日

米・イスラエルは、リビア・シリア・イランの三国をはじめ、アラブ民族解放勢力・人民の反帝勢力に対する軍事的・政治的対決の姿勢を強めていると同時に、ヨルダンに焦点をあわせて、単独直接交渉にひき入れる画策と、占領・併合政策を強引に展開している。

米・リビアの政治的・軍事的対峙は、中東における帝国主義と反帝国主義の攻防の構造を浮きぼりにしているが、二月四日、イスラエルはリビア機をハイジャックし、真のテロリストは誰かを鮮明にした。レバノンでは、シリアの反帝主導で成立した三者合意が、キリスト教徒内矛盾で頓挫する事態が生まれている。それは南部レバノンでのイスラエルの戦争挑発・占領政策と呼応した動きである。

また、一月末から二月初めにかけてもたれたアラファト・フセイン会談は成功せず、二月初めリビアのトリポリではリビア支持のアラブ・パ

レスチナ革命勢力の会合がもたれ、反米・反イスラエルでの共同を推進する方向にある。しかし、パレスチナ革命勢力指導部の再統一の見通しはない。西岸・ガザ・ゴラン・南レバノンでは、占領政策がますます強化されているにもかかわらず。

他方で、反帝勢力の強力な一翼を形成していた南イエメン（民主イエメン）で、指導部内の対立に端を發して、内戦状況を結果した。それは味方内で、指導部の統一と社会主義

目次

激化する帝国主義・イスラエルの策動.....	1
シーア派指導者、モハマッド・フセイン・ファドラッラー師とのインタビュー(資料①).....	6
PSP政治局局長アクラム・シェハエ氏とのインタビュー(資料②).....	9
SSNP高等評議会メンバーのマルワン・ファレス氏とのインタビュー(資料③).....	11
PNM(ナセル主義人民運動)リーダーのムスタファ・サアド氏とのインタビュー(資料④).....	13
シリア系アラブ・バース党、レバノン支部長、アーセム・カンソー氏とのインタビュー(資料⑤).....	14
ヨルダン系イスラエル秘密合意(資料⑥).....	17
DFLP闘争目標 創立17周年に際して(資料⑦).....	17
日本赤軍声明(資料⑧).....	18
激動の中東ドキュメント(1986年1月9日～1月31日).....	18

経済建設の困難さを表わしている。八五年中東において、反帝勢力のイニシアチブが強化されたのに対し、八六年に入って、米・イスラエルは政治・軍事的反撃を強力に展開し始めている。帝国主義勢力の思惑通りには運ぶのか。それとも反帝勢力の巻き返しが成功するのか。はで

な政治的事件の背後の人民の粘り強い闘いこそ、決定的要因ではあるが。

1 三者合意破産の陰謀

一二月二八日に成立した三者合意は、レバノンに十余年ぶりに平和をもたらすかにみえた。しかし、三者合意成立過程でのキリスト教徒内盾は一月半ば、全面化した。

直接の発端は、アミン・ジェマイエルのダマスカス訪問、アサド大統領との会談である。ジェマイエルがダマスカスへ出発した一三日、LF(レバニース・フオーシズ)ホベイカ部隊とジェマイエルを支持するフアランジスト党民兵間に戦闘が開始され、ジェマイエルが帰国するまで続いた。三者合意に同意しないまま帰国したジェマイエルは、それまで静観していたLFジャジャ部隊(と軍?)に對ホベイカ攻撃を要請したといわれている。一五日の明け方、ジャジャ部隊は戦車等をくり出し、ホベイカの本拠等拠点を急襲した。LF内部から攻撃を受けたホベイカ部隊は守勢に立たされ、ホベイカは国防省に救出された後、国外逃亡を強いられた。昨年、イスラエルの南部レバノン「撤退」と軌を一にして、アミン・ジェマイエルに叛旗をひる

がえし、左派民兵勢力に對し、挑発的軍事行動を展開したジャジャは、その後、アミン・ジェマイエルの意向で、LF司令官(執行委員長)の地位をホベイカに譲らざるを得なかった。そのジャジャにアミン・ジェマイエルは出動を要請したのである。ジェマイエルの意思は明白である。三者合意の破産をホベイカの追放によって果そうとしたのである。アサド大統領との会談時、アミン・ジェマイエルの三者合意に對して拒否した点は、三者合意の骨格を否定するものであった。その拒否の主要な点は、①宗派政治の廃止、②大統領権限の縮小、③シリアとの特別の関係、④国会議員数をキリスト教徒とイスラム教徒同数とする、⑤議員指名の原則とその数の増大、についてである。これらは、修正という範囲を越えていて、シリアは、これ以上の首脳会談を拒否した。アミン・ジェマイエル支持を停止したのである。シリアは、ホベイカがマロナイトを始め、キリスト教徒を代表し得ると考えたかもしれない。しかし、ホベイカは、それほどの力を持っていなかった。

だが、ジェマイエルの思惑から外れて、ホベイカの敗退は即三者合意

の破産を意味しなかった。ジャジャは、ホベイカがレバノンを出た翌日、「レバノン危機解決のため、シリアの援助の下で、国民的解決をめざす」として、シリアに敵対する行動をとろうとしない事を表明し、一九日には、「キリスト教徒内全武装勢力はLFに統合され、個別のいかなる武装勢力の存在も許されぬ」と語った。LFの新副司令官カリム・パクラドウニは、政治面・保安面に對して三者合意の精神を尊重する事と、ホベイカ追放はレバノンにおけるシリアの役割に反対するものではない事を表明している。これは、ジャジャ、パクラドウニがホベイカの位置・役割にとって代わろうとしている事を意味する。ジェマイエルとジャジャは同一路線ではない。

一月二五日には、ブキルキでキリスト教徒マロン派の大会合がもたれた。そこには、二人の元大統領、一人の国会議員と一三人の司教が集まった。会議後の声明は、三者合意支持の方向であった。曰く、「マロン派会議は、合意が実現しようとしている内戦停止、政治改革、レバノン・シリアの特別の関係という目的を歓迎する」。その後、この会議に参加したマロン派議員独立ブロッ

クのメンバーは、ダマスカスを訪問して、三者合意の基本的支持を伝えられている。他方、ホベイカは、シリアを通じてレバノンに帰国。体制を再編し、既に、三者合意支持、アミン辞任を呼びかけているフランジェと共同する旨、表明している。

以上から、キリスト教徒内最大宗派マロン派は、三つの潮流に分かれているといえる。第一は、三者合意に実質反対のアミン・ジェマイエルと、カミーユ・シャムーン。第二は、ジェマイエルと共同しつつ、独自基盤を作って、ホベイカにとって代わろうとするジャジャ。第三は、三者合意推進派のホベイカ、フランジェである。

第一の潮流のシャムーンの国民自由党は、南レバノンのSLAの下に部隊を送り、さらに、イスラエルの訓練をうける予定と言われている。この潮流が、米・イスラエルの意向を反映している事は、明らかである。しかし、今のところ、アミン・ジェマイエルは、ホベイカ追放により、逆に、基盤を喪失している。ジャジャは、アミン支持のフアランジ党の民兵組織を統轄するようになり、政治的には、レバノンの平和の唯一の

道であった三者合意に実力で対決したため、マロン派総体からも孤立する状態である。シリアとの交渉は、シリア側が首脳会議を拒否し、アルジェリアやソ連を通して関係改善を求めているが、成功していない。アミンは、軍事的にも、NUFに結集する左派勢力から圧力をうけている。閣議招集しようにも、カラミ首相以下三分の二の閣僚がボイコットしている状況にある。

キリスト教徒内の対立が激化していく限り、キリスト教徒、とりわけマロン派の力が弱まっていかざるを得ない。そして、結局のところ、三者合意は、時間がかかっても、確認されていくものとなろう。

2 イスラエルの南レバノン占領強化

南レバノン人民に対するイスラエルの弾圧・占領政策は、三者合意の進展と共に、ますます狂暴になってきている。

一月二九日には、サイダ市郊外のアイネ・ヘルワキャンプをイスラエルが空襲。三一日には、「セキユリティゾーン」内の三五平方キロを掘で囲んで、閉鎖した。これらは、単にパレスチナ、レバノン革命勢力の攻撃に對する報復という以上に、シリア主導下の三者合意に對する破壊攻撃であり、実利として土地と水資源奪取の占領政策なのだ。

その併合のニュースと同時に、イスラエル機は、サイダ市上空でビラをまいた。このビラは、住民に對して「パレスチナゲリラに協力するな」との警告を發したのだ。「パレスチナ組織とどんな共同をしても、お前

の家を破壊するぞ」と、イスラエルの

北部軍管区司令官オリ・オレ署名のビラ。だが、イスラエルの弾圧が荒れ狂えば狂うほど、レバノンの抵抗運動は強くなっていく。それゆえ、三者合意破産をもちろむイスラエルの弾圧強化は、逆に、三者合意再成立にむけた国民的合意を固めていくであろう。

ただし、攪乱要因がある。一つは、右からで、シャムーンは、イスラエル・SLAとの共同の下、左派勢力に對する攻撃を準備している。もう一つは、左派内で、ヒズビッターが、三者合意を認めていない事である。もう一つの問題は、今、南レバノンに駐留しているUNIFILである。イスラエルは、UNIFILの駐留延長に反対。なぜなら、UNIFILは「セキユリティゾーン」強化政策の障害となっており、SLAとも不断に衝突しているからである。米國もUNIFIL駐留延長に、実質的に反対している。また、急進派のヒズビッターは、UNIFIL存在の意義を認めていない。他の左派勢力は、イスラエルがより露骨な占領政策を展開してくる事を警戒している。

イスラエルは、占領地を併合する

事による実利と共に、政治交渉の道具にしてきたし、今後もしていくだろう。エジプト・イスラエルのタバ問題でやっているように。南レバノンの併合によって、五・一七協定復活を狙っているともいえる。

それゆえ、レバノンの和平実現にむけて味方が前進すればするだけ、イスラエルの攻撃も強化されるし、また、それへの反撃も強化される。この南レバノンにおけるイスラエルの占領政策の強化は、西岸・ガザにおける占領・併合政策強化と一体のものとしてある。

3 米・イスラエル対反帝強固戦線

今年に入って、米帝はヒステリックにリビア非難をしかけた。一月七日、レーガンの發表した対リビア制裁措置は、リビアを政治的・経済的に孤立させ、軍事挑発をしかけるものであった。しかし、対リビア経済制裁は、ほとんど効果がなかった。米帝の同盟国西欧諸國は、レーガンの呼びかけにほとんど同調しなかった。ローマ・ウィーン空港におけるエル・アル航空カウンターへの攻撃作戦をリビアが支援したという明白な証拠がなかった。

以上、再び、三者合意が確立されるのは、時間の問題である。アミン・ジェマイエルは今や、三者合意を認めるか、大統領辞任かの二者択一を迫られている。

イスラエルは、占領地を併合する

イスラエルは、占領地を併合する

イスラエルは、占領地を併合する

西欧諸国が同調しなかったばかりか、アラブ諸国がこぞって、リビアの立場を支持。そして、この間悪化していたリビア・アルジェリア関係も、今回の問題を軸に、ベンジャエド大統領とカダフィ大佐が会談を持ち、アルジェリアはリビア支持を強くうち出している。米帝は対リビア制裁呼びかけを社会主義諸国に対しても行ったのだが、もちろん、ソ連は、米批判・リビア支持・防衛を表明している。レーガンのこの雄叫びも、政治的には逆効果となってしまう。

しかし、政治的効果は逆でも、軍事緊張は一月後半から末にかけて高まった。二月一日からの対リビア制裁措置実施と、米帝のリビア沖での軍事演習がそれまで行われた事。

結果として、何もおこらなかったと考えた矢先、二月四日、イスラエルは、リビアの民間機をハイジャックした。同機には、シリア・パース党副書記長アハマル氏ら、シリア政府、党代表団二人が乗っていた。

イスラエルは、同機を被占領地パレスチナ北部に強制着陸させ、乗客全員を取り調べた。イスラエル政府は、パレスチナ「テロリスト」リーダーが乗っていると、この国家テロ

にうって出たのだが……。後に、シモン・ペレスがイスラエル国会で弁明するに、P.F.L.P・G.C派のリーダー、アハマド・ジブールを主要対象としていた様である。「我々は、奴が乗っているか否かの確証を得ねばならぬと決断した」とか。外相シヤミールも、「イスラエルは、テロリストの親玉をあらゆる可能な方法で逮捕し、処罰していく」と、国際的世論の非難も意に介さず、イスラエル国家テロの正当化を行っている。

米帝も、また、六日の国連安保理でのイスラエルのハイジャック批判の決議に対し、拒否権を発動し、イスラエルを擁護している。米帝の国連代表ワルターズ曰く「米国は、テロリストが乗っているという確実な有力な証拠がある場合にのみ、民間機の航行を阻む……この決議は航空機の航行阻止が正当化される場合もあり得る事を考慮していない点で、この決議を受け入れ難い」と語った。

対「テロ」対策として、全ての行動が正当化される論理。米帝とイスラエルは、これを展開しているのだ。こうしたキャンペーンは、次の反「テロ」テロ攻撃を正当化する。

アラブ諸国を始め、全世界の国々がイスラエルのこの蛮行、国家テロ

ルを非難した。しかし、こうした非難は、イスラエルに対する実質的な打撃を与えない限り、意味がない。例えば、アラブ諸国の対イスラエル・対米経済制裁の呼びかけは、実効力を持ったものになっていない。米帝・イスラエルの立場は、政治キャンペーンとして、対「テロ」テロ行動をあたかも正当なものであるとして、常態化させるもくろみなのである。

米帝・イスラエルのなりふりかまわぬ攻撃的な対リビアキャンペーンに対して、リビア、シリア、イラン、そして、パレスチナ、アラブ革命勢力は、反米帝・反イスラエル強固戦線ともいえるべき「アラブ革命勢力民族指導部会議」を、リビアのトリポリにて開いた。アブ・ニダール派も参加したと言われている。アラファト派を除くほぼ全体が結集し、リビアの自力更生、対米政策支持確認を行った事は、大きな意義がある。イスラエルがハイジャックしたのは、この会議参加後、帰国途上であったシリア代表団用の特別機なのであった。イスラエルがこの会議に対して、どれほど警戒しているかをうかがわせるテロルであったと言える。中東において、米帝・イスラエル対反帝

反イスラエル勢力の対峙がより激化している事を、これは意味している。逆にいえば、中間的道をとってきたものがより立場を明確にしていることが問われているのである。

4 パレスチナとヨルダン

P.L.Oアラファト派とヨルダンの共同歩調は、一月下旬から二月初めにかけて行われた両者の会談は共同方向を確認しえないまま終り、アラファトは、二月七日、何の共同声明も発表せず、アンマンを飛び去った。フセインは、イスラエルの存在権を認め、国連決議二四二、三三八を認め、武装闘争を放棄することを迫ったといわれる。しかし、アラファトは、米国がパレスチナの自決権、P.L.Oを承認しない限り、フセインの（つまり、米とイスラエルの）要求を受け入れられないという立場を堅持した。アラファト・フセインの共同イニシアチブは、昨年の段階から壁におちあたっていた。それゆえ、今回合意が成立しなかったことは何の不思議なことでもない。今注目すべきことは、アンマン合意が挫折していることにあるのではない。P.L.O抜きのパレスチナ問題の解決の方向が、米・イスラエルとヨルダンとの

間で少しずつ進められていることにある。

つまり、昨年一月二六日、親イスラエル、サーフェル・アル・マスリ（ナブルス商工会議所所長）をパッサム・シャカー氏にかわるナブルス市長としてイスラエル占領当局が任命して以降、イスラエルは西岸地区の行政体制を強行的に再編し、親イスラエルのパレスチナ人をパレスチナ代表にデッチあげようとしている。これにはヨルダンも加担している。ヨルダンにはマスリ任命に反対してストを行っている市役所職員に対する給料の支払いを停止している。

ヨルダン・P.L.O合同代表団が米國特使との会合や、英国外相との会談に失敗して以降、ヨルダンは、西岸内親イスラエルパレスチナ人をパレスチナ代表に仕立て、ヨルダンとの共同で、米・イスラエルと交渉する方法を模索している。イスラエルのペレスも、米のレーガンも同じ考えである。三者間のちがいは、段どりと分割の割り合いの問題であり、「P.L.O抜き」で一致している。

親イスラエルパレスチナ人はイスラエルによる西岸やガザ併合の協力者である。すでにマスのりやったことは、まず、ナブルスの電力公社を

イスラエルの電力公社に合併したことである。

西岸問題は、シナイ問題のようはいかない。そこにはエルサレムがあるからである。エルサレムはイスラム教徒にとって聖地である。つまり、アラブ総体にとっての聖地である。それゆえにこそ、昨年のカサブランカサミットでは、エルサレム問題をめぐって、アンマン合意に枠をはめ、アラブの総意をもって、エルサレムの解放抜きにかなる合意もありえないことを、確認したのである。

イスラエルは、それを知っているゆえにこそ、現在エルサレムにあるアル・アクサイスラム寺院に対する挑発的な攻撃を行っているのである。

（一月八日、一〇人のイスラエル国会議員は、同イスラム寺院が、サブラ・シャティールキャンペーンでの虐殺の碑を含む非法建築物を建てたという報道の調査という口実で、アル・アクサ寺院に、公式カメラマンを引き連れて、寺院に入った。彼らは、寺院内でタバコを吸い、写真を撮った。その直後には、カハ党が寺院突入を試み、それに抗議するイスラム教徒パレスチナ人が弾圧逮捕された。）

ヨルダンにとって、西岸の奪回や、

パレスチナ国家建設は死活問題ではない。むしろパレスチナ人を統治し、イスラエルと平和を実現しつつ、アラブ諸国と共同し、米帝の援助を受けて資本主義国家としての繁栄を築き上げることである。P.L.Oのアラファトと共同することに利益がなくなれば、すぐにでも放棄するだろう。

ヨルダン人民が全てそうだというわけでは、もちろんない。一人のヨルダン兵が一月二九日、ヨルダン川を渡り、ヨルダン峡谷のメトラ入植地近くで、待ち伏せ攻撃し、二人のイスラエル兵を殺した。彼自身も射殺された。ヨルダン人民は黙り続けているわけではない。彼らも、エジプト人民と同様に施政者に期待しているわけではない。イスラエルと闘わないことにおいて、ムバラクやフセインを非難している。

ヨルダンと結局のところうまくいかなかったアラファト派の次のステップは、対シリア関係の改善以外になくなっていく。シリアもまた、ヨルダンとアラファト派の共同が一定壁におちあたって現在の現状では、より幅広い反イスラエル戦線を形成するために、アラファト派と共同していくことが問われているだろう。

米帝、イスラエルが、リビア、シ

リア等反帝進歩勢力とP.L.O等民族解放勢力に対して露骨に攻撃してきている現在では、反米・反イスラエル戦線としてあらゆるレベルの共同を実現していく必要がある。トリポリ会議もその一つであり、シリア・アラファト派の関係改善の模索もまたその一つである。

敵の側が、「P.L.O抜き」の和平交渉を進めようとしているのに対し、P.L.Oとしての主体を回復していくのか否か、つまり、パレスチナ解放勢力内共同と反帝アラブ諸国との共同を実現発展していけるか否かに、今年の課題はかかっている。

5 南イエメンの内紛問題

だが、リビア・シリアと米・イスラエルの緊張が高まっている最中、一月一三日、南イエメンで指導部内クーデターが勃発した。アリ・ナセル・ムハマド大統領派がアブデル・ファタッハ・イスマイリ元大統領派を政治局から追放しようという試みに端を発して、指導部間闘争が内戦状態にまで発展し、一万人以上の死者と莫大な物的損害を出して、一月下旬に一応の終息をみた。

指導部内対立には、社会主義経済建設を大規模なプロジェクトをもっ

て進めるのか、小規模経営も尊重しながら漸進的に進めるのかの相違と、北イエメン、ガルフ諸国などの親米諸国とも友好関係を保ちつつ、社会主義建設に結びつけるのか、ソ連など社会主義諸国との関係を軸に、近隣に対しては強硬路線をとってゆくのかの外交路線上の相違があったと言われている。

しかし、現状の中で、ソ連としては、ガルフ諸国との関係改善を重視しており、イスマイリ派の強硬路線を支持していたわけではない。結果として、アリ・ナゼル・ムハマド大統領が追放され、叛乱派が指導部を形成したが、内紛当時、モスクワにいた首相と外相が帰国して、元首と首相に就任。これまでの内政・外交路線に変更がないことを表明している。クーデター・内戦問題は一国内の問題として、外部的干渉は一切断った。一時期北イエメン軍とPLOアラファト派が軍事的に介入しようとしたが、南イエメンの両派とも、これに反対し、介入を押えた。それを許したら、いずれ帝国主義勢力の介入を招くことになったろう。内政問題として収束させえたのは、南イエメン自身の力によるだろう。

戦線の一翼を担い、パレスチナ革命運動にも大きな貢献を果たしてきた南イエメンにおいて、こうした内戦を結果させた政治的・物質的打撃は大いさ。このクーデターの要因となった経済建設上の困難と外交関係上の矛盾ということ、どこの国でもかかえているからである。

指導部間の路線上の相違から莫大な損失という結果を招きうるといふ事実から、我々は指導部内の統一の重要性の問題として教訓化しなければならぬ。それはまた、現状における社会主義経済建設と反帝国主義路線の統一の問題としてある。米国は、新政権に対して、ソ連が画策して、デッチあげたものとして認めないと表明しているが、ソ連等社会主義諸国および進歩勢力は内戦の停止と対立両派の調停を行ってきた側であり、煽動した側ではない。内戦を歓迎しているのは、南イエメンに敵対してきた、サウジなどガルフ諸国や北イエメンであり、何よりも米帝など、帝国主義諸国であった。南イエメンの内戦は、帝国主義勢力を利するもの以外ではなかった。それゆえ、反帝勢力は、これ以上帝国主義を利さないよう、停戦にむけて必死に努力し、その結果、内政問題

として収束させてきた。内戦の再燃と帝国主義勢力の介入を阻止すると同時に、南イエメンの反帝戦線としての再建、社会主義建設のための共同が、味方総体に問われている。

レバノンにおける三者合意の頓挫、西岸・ガザにおけるイスラエル占領政策の強化、リビア機ハイジャック、米帝によるリビア・シリア非難と軍事挑発……これらはすべて、反帝進歩勢力の主導権強化に対する帝国主義勢力の側の反撃である。このことは、同時に、アラブ人民の反米・反イスラエルの闘いの高揚と強固な意志の存在を浮きぼりにしている。それゆえ、米帝・イスラエルは、現在の反「テロ」テロ行動をとりつづけるだろうし、中東緊張政策をより活発化させるだろう。これに對峙する反帝勢力の側は、人民の疲れを知らない闘いに依拠し、反米・反イスラエルの闘いにむけた統一を作り出しつつ、政治的にも、軍事的にも再編していくことによって、主導権をとってゆけるだろう。

資料①
シリア派指導者、モハマド・フセイン・ファドラッラー
師とのインタヴュー
「勝者と敗者がいなければならぬ」
誰に三者合意失敗の責任がある
と考えるか。

この件は、内的側面と外的側面とを共に持っている。内的側面に限ると、レバノン人が現実的な行動をとらなかつた——客観的な方法で政治的な現実に対峙しなかつた、ということだ。レバノンのある派は、現実の諸事案にかまうことなく、過渡期間を短縮して、他派からその目的を奪うことを考えた。一方で、別の派は、歴史の前進をおしとどめることに汲々とし、五〇年から一〇〇年前に適用された政治的既得権は不変のままあり続けるべきだと思っていた。
両者の態度はともに非現実的だったので、この両派は、つんばい同士の対話をやれただけだった。両派がレバノン人すべてを代表しているわけでは無論ないが、レバノンの政治的現実において、彼らは、まさに主要

な部分を構成しているのだ。

外的レベルに関して、我々は、レバノンの危機が外国の要因のひとつの結果だということ、実際、国家としてのレバノンが外国の均衡状態の中に、取るに足らないものを構成するよう創られたということをよく知っている。実際に起こっているように、レバノンにかがわっている地域的・国際的諸勢力は、現在の局面を、彼らの関与の終局にふさわしいともあるいは、救済が必要な段階にあるとも見てはいない。それゆえ、これらの外的勢力は、レバノン人に解決は近いとの幻想を与えたり、いくつかの解決案に導こうとしたりするかもしれないが、依然として、解決をばむ多くの障害があることは、先刻承知の上なのだ。彼らがそうするのは、現実にある真の危機から、レバノン人の目をそらすためばかりでなく、新しい情況と多分新しい対立

——彼らの動きを助けるか、加速させるような対立——を創り出すためでもある。この意味で、我々は提案される諸計画や諸協定を、危機解決の手段とは見ず、むしろ、地域的あるいは国際的解決を求めざるをえないような新たな危機の創出の道具とみなす。

問 換言すると、あなたは、レバノンの危機と地域的危機とをきわめて密接に結びつけているということか。

答 全くそのとおり。私が常々言ってきたことであり、今もなお固執していることは、占領軍としてにせよ、政治的にということにせよ、イスラエルがレバノンに在る限り、また、地域的あるいは国際的に主要な諸勢力が、レバノンに何らかの形で存在し、利害を持っている限り、レバノンの危機と中東危機を分けることはできない、ということだ。

レバノン危機と地域的危機を結びつけることは当然のことだ。前者は後者の直接的結果であって、それは地域的危機それ自体が解決されるまで、終ることができないのだから。

問 東ベイルートの諸変化は、レバノンを元の状態に戻したと言われているが、あなたのコメントは。

答 我々はこれまで、元の状態を克服したことがあったのだろうか？我々が「諸変化」として語るのを正當化するような新しい政治情勢が東ベイルートにあるのだろうか？ 事実はこうだ。——我々は元の状態から脱したことはなく、単に我々が動き出すという計画があっただけで

あり、その計画が実現されなかった

ので、我々は動かなかった。同様に東ベイルートでは、何の変化も現実におきなかった。今、そこで声高に喋っている人々は、(三者)合意がとりざたされて以降、ずっと同じ考えを持ちつづけてきた人々だし、そこで敗北した一派の方は、彼らを代表していなかったのだ。したがって、そこで生じたことを変化とみなすことはできない。むしろ変化を阻止する作業だ。

問 政治的圧力と政府ポイコットは、レバノン危機の解決を導き出すと思

うか？ それとも、軍事的決着を通してのみ解決可能なのだろうか？
答 私は、レバノンが新たな戦争や対立の余地を残さない自然で健康的な進路をとる方法は、優勝劣敗の政策に基づかねばならないと信じている。これは、世界中の全ての国において当てはまるもので、必ずしも抑圧を通して実現される必要はない。世界中の国には、多数派と少数派があり、全世界は優勝劣敗の政治的土台の上に動いている。それは、多数派が少数派を抑圧していないなら、統治しているという意味だ。本当のところ、多数派による少数派の統治

は、この少数派にとって一種の無意識的抑圧ではあるのだが、その少数派もそのうち支配する多数派へと成長するかもしれない。

妥協とは、統治の不在、定まった足場の不在を意味しており、我々がレバノンで生きてきた情況というのは、そうであった。レバノンには、真の国家はなかつたので、ある種の部族間連合を生み、特有の情況を作ってきたので、それ自身が、ある種の文明的雰囲気を持っている。以下が私の意見だ。レバノンが、世界に通用する意味での国家となるためには、ある決着が不可欠だ。だが、前にも述べたように、これは必ずしも抑圧的決着である必要はない。ただ、薬では治らない病気に必要な手術であればよいのだ。

政府の孤立化あるいはポイコット、あるいは軍事的決着選択として言われていることに関して、私は以下のように考える。起こり得る衝突の衝撃を柔らげるか、ないしは、解決にむけて、将来の様々の提案に好ましくない雰囲気をつくりだすような政治解決を獲得するために、圧力が加えられつつある、と。

問 何人かの指導的人士が、宗派制

の即時廃止を呼びかけているが、可能だろうか？ また、あなたはこうした方法を支持するか？

答 我々は、政治的宗派制の廃止を、疑問の余地なく支持しており、またその実現のためのショック療法にも賛成だ。レバノンでの政治的宗派制の廃止は、三者合意がめざしたような伝統的方法によって到達できない。圧倒的な宗派的雰囲気とこの国の宗派による分割という既成事実のためだ。そこでは、各宗派が既得権を維持し、宗派制廃止には、あらゆる可能な手段を用いて闘おうとするだろう。だが同時に、全宗派は治安事情によって制約されてもいる。この治安事情は、地域的あるいは民族的レベルで、互いに交渉しあう機会を減少させている現在の政治的雰囲気が悪化させたものだ。

それゆえ、政治的宗派制を即刻廃止する我々の最良の機会は、悲劇的治安情勢と政治情勢に終止符を打つような解決へのレバノン人の欲求から学習することだ。だがこの実行を（三者）合意に明記されているように、一〇年、一五年といった期間で考えることは非現実的だ。その時までは、宗派的狂信はいっそう肥大化し、いっそうの圧力がその廃止に

問 ヤセル・アラファトPLO議長は、レバノンの難民キャンプのパレスチナ人がお武器の供給を受けて続けていると語ったが、これは戦闘の威嚇か？ もしそうなら誰に向けられたものか？

答 現状はこの種の戦争にとって好ましいものではないと思う。というのも、戦争、ことにキャンプ戦争というものは、パレスチナ、レバノン、アラブの各レベルにおいて何らかの要素を「再調整」する必要——地域的な必要——がないところで、燃えあがるものだからであり、そのような戦争が現在アラブの利益になるだろうとは信じない。

問 UNIFIL駐留が更新されないだろうとの恐れがでているが、撤退になった場合、南部の成り行きはどうなるか？

答 我々はUNIFILの管制地域をサイドへ、もしくはリタニ川北部へ変更しようという欧米の計画があると察している。また、ジェジン問題は現地への国際軍の展開をもたらすような大規模な軍事的圧力の始まりを示しているのかもしれない。UNIFILが南部から撤退した場合何が起るかに関して、私は現状より悪くなるうとは思わない。なぜなら、UNIFILは決して南部住民を守ってこれなかったのだし、最大限良く言って、溺れる者がわら

問 われることになっていくだろう。その圧力は、唯一新たな戦争と新たな暴力を通してのみ生まれる。そうならば、今、戦争の結果としてしか在りえないものが何なのかを、しっかりと把握し、それを避ける方が好ましい。我々に十分な悲惨と悲劇をもたらしたこの戦争で満足し、これを利用しようではないか。今こそが、政治的宗派主義を廃絶し、新生レバノンの正しい心理的雰囲気を出す最良の時期だと思う。

あるいはアラファト自身に対する圧力行使の手段としての境界線づくり役に立ちうるくらいだ。我々はアラファトと彼の一派がパレスチナ人の政治的リーダーではないことを知っている。しかしながら、キャンプは戦争の可能性を提供しており、レバノンに新局面をもたらすために、そのような戦争を活性化させたいと願う者たちが、喜んで闘おうという党派の一つ二つ容易に見つけられると、私は信じている。

問 スレイマン・フランジェ元大統領は、キリスト教徒会議の開催を呼びかけ、それは、まず、イスラム教徒会議、最終的にはレバノン危機解決のための民族会議によってフォローされていくものとしたが、あなたのコメントは？

答 まず、そのような会議をもつ理由から見なければならぬ。もし、開催目的がキリスト教徒とイスラム教徒とを一つの考えのまわりに結束させることであるならば、私がこう言うのを許してほしい。それが戦争終結という考えをめぐってのものでない限り、キリスト教徒は決して団結しないだろうし、イスラム教徒もまたそうだと。キリスト教徒は最近の残忍な戦闘で明らかになった通り、戦争終結という事以外のあらゆる

る問題で、分裂している。西ペイルトも、また、何ラウンドもの激しい戦闘を目撃したことは真実だが、ただ戦士たちが、仲間の戦士たちを壁に並べて射殺するのは、全くもって目撃していない。

政治的見解が、ペイルトの東でも西でも異なりあっており、そういうものとして、キリスト教徒会議にせよ、イスラム教徒会議にせよ、あるいはイスラム・キリスト両教徒会議にせよ、混沌として、何らの実りを得られない国会のようなものとなるだけだろう。

現時点は解決の時ではなく、時限爆弾が今日も明日も、あらゆる時々、合意を阻むために爆発するだろう。

レバノン人は、もはや現実を目をつぶるべきではない。自国の運命を自分たちが決めているのではなく、他人の手中にゆだねられているということとを認識しなければならぬ。

だが、この外部勢力も、わが国の運命を操っているからといって、非難されるものではない。これは、外国勢力を頼みにして、互いに他をうちまかそうとしているレバノン各派に唯一責任があるのだ。

問 ムハマド・メヒディ・シャムセディン師、ハッサン・ハリッド師、ムハマド・アブ・シャクラ師（各々順に、シーア派、スンニ派、ドルーズ派の精神的指導者）は、ダマスカスに招待された報道されているが、なぜあなたは招待されていないのか？

答 我々は公式的な意味ではなく、あなたの政治的立場もレバノン政局において代表していないし、政治的ゲームの当事者でもない。私は人々の意識を触発し、彼らが誤った道を歩むところでは、それを指摘して、彼らを善良、自由、独立へと案内する人間だ。私は円卓に臨む者ではなく、招待をされないで、大変喜ばしく思う。

問 P S P指導者のワリド・ジュンブラット氏が（ジェマイエルの拒否は）戦争状態への回帰であると宣言したが、これは、軍事衝突が不可避

問 ファドラー師は、対決は必然だが、それが軍事的でない事を願うと語っている。この意見について、どう考えるか？

問 そうなった場合、米およびイスラエルは、反対派を支援するのだろうか？

資料②
P S P政治局局長アクラム・シェハエブ氏とのインタビュー

答 我々も同じ事を願うものだ。なぜなら、もう一〇年間も軍事的対決を続けてきて、死傷者は甚大な上に、これ以上に深刻な社会的・経済的危機に陥らない。だが、ジェマイエルが国家元首として君臨し、軍事機構を掌握している限り、政治解決の可能性は、きわめて少ないという事実をも、我々は承知している。

答 イスラエル米は、今回の三者合意破壊策動に、大きな役割を果たした。この破壊策動は、片やイスラエル米、片やレバノンの政権と同盟した東ペイルトの指導者連中（つまりジャジャ一味）、この両者間の確固たる関係の結果にすぎない。イスラエルと米、奴らは、（人民が）待望してきた政治解決への機会を代表するこの合意をおちこわす策動の黒幕だ。これはもう、火を見るより明らかだ。

「両者共マイナス点
での引き分け」

問 合意履行をめぐって戦闘になったら、シリアも参加するだろうか？

問 ホベイカは軍事的に敗北した。ところが、それでもダマスカスを訪問し、ベリ、ジュンブラット、カッ

ダムシリア副大統領と会談している。彼の役割はまだどんなものがあると思うか？

答 ホベイカは、東ベイルートでの流血を避けようとして、合意を軍事的におしつける事を拒んでいた。パクラドウニ、ジャジャ、ジェマイエル政権、そして七五部隊（ジェマイエルに最も忠実な部隊）が合意反対を公けにした時ですら、軍事力で合意を強制する事ができたのだが、決心を変えなかった。

だが、現在我々が直面している軍事情勢から捉えれば、勝つか負けるかの二者択一しかない。中間という事は、あり得ない。そして、ホベイカは、東ベイルートの制圧戦では、軍事的敗北を喫したが、彼の役割がもうどこにもないという事ではない。彼は、今日はダマスカスにいるが、レバノンへもどろうとしている。彼には、地下化を余儀なくされたとはいえ、厳然たる支持勢力がレバノンにある。合意支持・実現をめざすフランジェや他の勢力と同盟を組んで、基本的な役割を果たす力をホベイカ支持派は有しているのだ。

レバノンにおける戦争状態を終結させ、（皆の合意する）改革を実現しようとするこの合意の調印者であり、レバノンの一潮流を代表する人物、それがホベイカなのだ。シリアとレバノン民族主義勢力は、彼を見殺しにはしない。パクラドウニやジョゼフ・ハーシム等、合意反対派が一再ならず我々へ接触を求めたが、我々は相手にしなかった。これが、その証拠の一つだ。奴らはシリアへも接触を試みた。シリアも相手にせず。なぜならシリアは平和の建設プランを援助してくれたのだが、ホベイカの反対者共（イスラエル）米の利益を代表する潮流）は、七五年に内戦をしかけた頃よりも過激になっている。

ジャジャは、クリスチャンの利益を守るに豪語するが、何をしたらどうか？ 奴がやった事といったら、クリスチャンをただただ悲劇へと追いやっただけではないか？ クリスチャンは、奴のために、エーデン、ザハレ、シューフ山岳、東部サイダから追い出されたし、今日では、アシュラフイーエ、フルン・アッシュツバークのギリシア正教徒が奴から攻撃を受けている。奴はクリスチャンから全てのものを力づくで奪っている。奴は、他人を一切顧みもせず、「俺が」「俺が」しかない人間だ。「俺が決める」「俺がやる」「俺が

禁する」で、東ベイルートでは、今や抑圧の空気が重くのしかかっている状態だ。

問 合意反対派との軍事対決になったら、ホベイカは民族主義勢力の側につくだろうか？

答 詳しい情報はないが、まちがいに三合意を擁護し、我々の側につくと思ふ。

問 ブキルキでクリスチャンの大会開催が予定されているが、正教派、カトリック派の人士は不参加とのこと。なぜだろうか？

答 正教派人士の数は、合意調印時、ホベイカに同行してダマスへ来た。彼らは銃で脅されたわけではなく、信念を持っていたから、そうしたのである。マロン派内にすら、合意に好意的な人士がいる。マロン派内には、断固反対のジェマイエル、ジャジャ派、支持のフランジェ派、ホベイカ派と、三潮流がある。そのうち二派が合意を支持している。クリスチャン大会なるものが開かれるとしたら、反対派集会というものになるだけで、本当に全クリスチャンの大会という性格にはならない。

問 ジェマイエルが合意拒否、辞任拒否をおろさない場合、レバノンはどの方向に進む事になるのだろうか？

答 山岳戦争前、バハムドゥン・ヤルゼ・ダハル・エルワハシと南部をつなぐという自分の計画を言い張って、五・一七協定の履行を計った。その結果、どんなに無惨な結果になったかは、周知の事実だ。

が、我々が現在直面している状況は、山岳戦争、西ベイルート解放をもたらし、ベイルート郊外の攻防戦、そして法的にも国会が破棄したところの五・一七協定もたらしたものである。ジェマイエルは、頻りにダマスカスを訪問してレバノン内戦解決の努力を装っていたが、実はジャジャとの協力により、三者合意流産を狙っていた。奴は、平和達成の全ての機会を封じ、結果として、情況は、政治、軍事、経済の分野できわめて危険なものになってきた。ジェマイエルが、ドル、人民の金を浪費し、人民と国の将来を弄んでいる時、貧しい者は、どうやって生き抜いたら良いのだろうか？

我々は、七五年のあの頃の第一回戦の引き分けより以前の状況に後退させられている。

問 では、何をなすべきだろうか？

答 今、必要なのは、迅速な行動だ。危機を解決するには、二つの道がある。合意履行、もしくは、合意反対者の除去。これ以外の道は、もうない。そして、ジェマイエルが何があっても合意阻止を策動し続ける限り、我々は未知の運命に直面していくしかない。

問 レバノン危機解決が三者合意のみによって達成されるのに、それがどうしても実現不可能という事なら、軍事対峙しかないという事だが……

答 三者合意に話をもちそう。この合意が民族主義勢力のあらゆる要求を代表しているわけではないのだが、暴力の悪魔的連鎖反応からレバノンを解放するために、それに賛成したのだ。ようやく調印にこぎつけた合意が、攻撃を受けた。それでも、我々はこの合意を達成していくしかない。信じているし、我々は責任をもつて、実現していく覚悟だ。

もしも、この合意が実現されていたら、政治解決と改革の第一段階（改憲、七五年来の離散者の帰還など）に進んでいたはずだ。言い換えれば、東ベイルートでの出来事さえなかったら、我々は遂に一条の光を

つかんでいたはずなのだ。

資料③
SSNP 高等評議会メンバーのマルワン・ファレス氏とのインタビュー

「合意に敵対するレバノン国軍」

問 第一回レバノンシリア首脳会議（シリア副大統領のカッダム氏によれば、「最後の」サミット）が何の結論も導き出さずに終わった。そうなること、今後のジェマイエルアサド関係はどうなっていくと予測するか？

答 確かに、このサミットは失敗だったし、ジェマイエルの腹は、唯一、時間稼ぎにあった。実際、第一〇回と第一一回の間の数日間、ジェマイエルは、東ベイルートで自分の敵対派を打倒する陣型を敷いていて、ダマスカスからもどるや否や、開戦の指揮を出した。そして、三者合意に調印した東ベイルート側の勢力は、東ベイルートから追い出された。

こうなれば、当然、ジェマイエル大統領とシリアの関係が極度に緊張したものとならざるをえないであろう。なぜなら、この合意を選択する

というのは平和を選択する事であり、誰であろうと合意を阻害すれば、それは即平和を阻害するという事になるから。

さらに言えば、東ベイルートの内紛を単にマロン派内の事件とは捉えない。ファランジ党とその同盟者共が合意調印者に叛旗を翻したという事は、奴らがマロン派外の勢力にも同じ事をする準備、覚悟があるという事を示している。なぜか？ 同宗派の人を殺した者は、全てのレバノンを殺す事をためらう事もなからうから。

問 シリアは、たとえ力に訴えてでも、この合意実践の決意をまだ燃やしているだろうか？ とすれば、カッダム声明では、シリアの立場は「積極的中立」との事だが、どういう意味になると思うか？

答 シリアが「積極性」と言う時、レバノンの平和を望む側を支持するという意味だ。「中立」とは、交戦中の各党派に対する立場で、戦争をまず止める事を望む、もしくは合意する党派全てを支持するという意味だ。

シリアは、敵シオニストとの対決陣型をどう構築するかという視点か

ら、レバノン問題の解決に力を貸そうとしており、中東レベルでの政治展開を行っている。シリアにとっての基本問題、即ち対イスラエル戦に専念しようというに、レバノン問題を解決しようとしている。

問 レバノン民族主義勢力（アマルPSP、SSNP、共産党）は、合意反対派を軍事的に制圧してでも合意実現をめざしているのか？ とすれば、どの様に、展望があるのか？

答 合意に調印した党派は、実現を責任をもってやりぬこうとしている。だが、五・一七合意破棄後は、戦争の論理が、シリアの援助を受ける中で、対話の論理に変わり、三民兵間の合意に結実した。

そして現在は、調印の当事者が敗北したという事実にもかかわらず、平和を勝ちとり、レバノンの制度近代化を勝ちとる闘いを、我々は、あくまで押し進める決意である。さらに、民族レジスタンスが勝ちとった諸成果を無に帰す事など、どうしても考えられない。このレジスタンス

は、軍事力量として存在してきたし、現在も存在している。今は、それらの諸成果を政治レベルのものへと転化させねばならぬ時なのだ。それらの諸成果は、民主主義と公正、宗派主義廃棄をめざしつつ、近代化された制度を通じて完結されるだろう。

問 東ベイルートでの戦闘中、軍の中立をどう考えるか？

答 軍の立場、またはレバノン国軍として残ったものが何であれ、東ベイルートで軍が実際にとった行動を中立とは言えない。あの時、軍は、誰でも良いから強い方についたのだ。だから、ここ数日間の軍の立場は、中立とは程遠いもの。ホベイカを東ベイルートから放り出すシナリオは、うまく作られてはいたが、軍は、反合意の立場を採った。軍は、今まで、和平へむけた合意、計画に対して、好意的な立場をとった試しがない。

問 北部レバノン、メトン高地と、新しい戦線が火を吹いているが、これは、どういう事なのだろうか？

答 合意に調印した東ベイルート側の相手(ホベイカ)の追放は、内戦再燃を示している。新しく戦争をしかけてきている奴らは、イスラエル

と強い絆をもっている。今回の東ベイルートの戦争は内ゲバだが、我々の側は、民族主義勢力への攻撃を予測しておかねばならない。我々が予防策を講せねばならなかったのは、だからであって、北部、メトンでの我々の行動は、予防的なもの、自衛手段としての一種の攻勢である。

問 エリ・ホベイカの敗退は、三者合意の終りなのだろうか？

答 ホベイカを追放した勢力は、合意に全面反対というわけでもなく、変革へむけた流動が始まっている。我々民族主義勢力は、これは良い事だと考えている。これから、我々は、民族主義勢力間の合意(民族統一戦線の合意)を擁護して闘う事にする。

問 ホベイカがほんの数時間で敗れた事をどう考えるか？ また、ホベイカの去った東ベイルートの政治展開の見通しはどうなるか？

答 東ベイルートからホベイカが敗退した事は、大きな問題ではないと考えている。ホベイカ打倒では協力した連中だが、いずれ相互に新しく内ゲバを始めるだろうし、事態は変化し続けるだろうから。東ベイルートの抗争は、原則をめぐってのものではなく、利益をめぐってのものである。だから、この抗争は、個的利害を優先させる体制を確立するための宗派主義を守ろうと闘われている。事実、ホベイカ打倒で野合した連中は、宗派主義保存で利益がある宗派なのだ。だからこそ、連中は、どんな問題でも一致を作る事もできず、相互に力で排除しあって自滅するしかない。

問 PLO議長のアラファトは、レバノンのパレスチナキャンプに武器を送っていると発言している。ベイルート、サイダのキャンプでアラファトが戦闘をしかけてくると思うか？

答 アラファトの言う事には、嘘もある。が、キャンプ戦争をしかけてこないという事ではなからう。とくに、彼が、敵イスラエルとの和解をめざす投降主義的計画を放棄したわけではないから。

我々はPN SF(パレスチナ民族救済戦線)を支持し、パレスチナ人民の唯一合法的な代表として、PLOが正しい路線に復帰するようにPN SFが闘うよう期待している。PN SFのパレスチナの兄弟達と共に、どの地域であれ、新しく紛争・戦闘

が起る可能性に対して、我々は十分な準備をしている。アラファトはまだ自分のプランを何とか成功させようとしているし、サイダ、ベイルートのキャンプには、彼の指揮に忠実な分子を配置しているから。

問 いかなる代価を払ってでも、合意実行という決定になったら、昨年のトリポリ攻防戦のような事になると考えておくべきだろうか？

答 我々は、内戦再燃を暗示もしないし、再燃したとしても、その責任を負うものでもない。我々としては、民主的な回路を通して、レバノンの近代化をあくまでめざす。だが、現在のシステム、(ジェマイエル)政権、そしてファランジ党の道具どもが我々に対して宣戦布告をした。だから、我々としては、自衛するしかない。その自衛(戦)が、レバノン全土で闘われる事になるかもしれないという事だ。



資料④
PNM(ナセル主義人民運動)
リーダーのムスタファ・サアド氏とのインタビュー

「合意に何の反対もない」

問 南部諸村へのイスラエルによる激しい攻撃は、国境から撃ち込まれたロケット砲への報復のみだろうか？ そうでないとしたら、奴らの真の狙いは？

答 イスラエルは、レバノンでの制圧地域拡大のめくろみをもって、部隊を増強し、南部諸村の村人を追放している、と私は思う。ガリリーへの脅威を軽減する事だけでなく、もっと水資源と土地を獲得するために「セキュリティゾーン」拡大をもくろんでいるのだ。

今日、南部で起こっている事は、ガリリーに撃ち込まれたカチューン砲に対する単なる報復とみなすには、余りに深刻だ。イスラエルは、村民を大量に追い出し、新たに村々を占領している。それでも、シリア以外のアラブ国家、元首達がこういう犯罪を指弾しないのを見ると、本当に胸のつぶれる思いだ。

敵がアラブ国家を攻撃した時はいつでも、レバノン人民は、レバノン全土でストやデモを打って闘ってきた。それなのに、今日、アラブはどこにいるのだろうか？ アメリカ系アラブ、ガルフのアラブは、どこに行ってしまったのだ？

さて、三者合意についてだが、イスラエルがシリアの後押しを受けたこの合意を何が何でも撃沈してしまうと考えているという事は、周知の事実である。これにむけた策動が、東ベイルート、南部での諸々の陰謀として現象してきている。そして、それだけではすむまい。やがて、うまく細工した大量殺人攻撃になっていくだろう。

イスラエルは、八二年のレバノン侵攻の口実を駐英イスラエル大使暗殺未遂攻撃への報復であると正当化した。が、これは、嘘八百。イスラエルが狙っていたのは、レバノンへの拡張なのだ。イスラエルが南部にいつそうの攻撃をしかけてくるだろうと我々は信じている。同時に、南部全人民は、この敵と対決し、敵にさらなる被害を与え、イスラエルの目的の一つとして実現させたりしないであろう事も、我々は確信している。

我々は、ダマスカス合意実施を決意している。この実施のために、どんな努力も惜しまない。なぜなら、これこそ、レバノン危機解決の唯一の方法だからなのだ。

問 レバノン国境からの対イスラエルロケット砲攻撃継続を支持するか？

答 イスラエルおよびその同盟軍に対するレバノン民族の対決とレジスタンスを完全に支持し、有効な抵抗戦術をもっと編み出そう、もっと攻撃しよう、呼びかける。しかしながら、遠距離からのロケット攻撃という概念——ヒットアンドラン政策は拒否する。

国境越しのロケット攻撃は、何ら目新しいものではない。そして、これまで、この種の攻撃は積極的なものを何も作り出さなかった。だから我々は、イスラエル兵を直接攻撃目標とする質的対決を呼びかけるのだ。イスラエル兵どもときたら、憶病者だ。イスラエルが捏造した伝説的な英雄なんかではないという事を自ら暴露してしまっただけだから。

問 レバノンは、国連安理にイスラエルの南部攻撃に抗議する提訴を

行ったが、どういう結果になるだろうか？

答 イスラエルを非難するしないに拘らず、どんな決議案を作っても、イスラエルを実体的に統制する事はできないと考えている。安理決議が影響力を有するとしたら、イスラエルは、とっくの昔に決議四二五号を実施しているはずだ。だが、現実には、見ての通り。いくら決議を採択しよう、何の変化もないし、意味もない。

では、我々は、なぜ国連に提訴したのか？ 国際世論の反応を期待したのだろうか？ だが、世界は、イスラエルが勝手に「建国」を宣言した四八年来、何も反応していない。

ここで私は、付け加えたいが、米が本場にUN IFILへの財政援助を停止すべきだとしているのなら、その分、アラブ諸国が穴埋めをしなければダメだと思う。UN IFILが撤退するとなったら、イスラエルがいっそう激しく南部攻撃にうって出てくるかもしれないからだ。南部からのUN IFIL撤退という米—イスラエルの陰謀は、全くもって危険な、深刻なものだ。

問 サイダ北部のアワリ川までのイ

スラエル再侵攻の危険性について？

答 それはいいだろうとみている。もう一度、自分の軍隊が粉砕されるのは、忍びなからうから。イスラエルは、レバノン侵略により、最悪の敗北を味わった。イスラエル軍は英雄の軍隊として侵略してきたもの、かつてない形で撤退せねばならなかった。もう一度、解放区に軍を進めようものなら、さらにしたたかな、強力なレジスタンスを覚悟せねばならない。これを十分承知しているし、そんな意気な目には遇いたくないだろう。

だが、イスラエルは、「セキユリティゾーション」なる国境回廊の拡大、どこであれ占領地に施政権を強制していく事は、やっていくだろうと思う。だからこそ、民族レジスタンスは、そうした動きへむけたイスラエルの策動の一切を粉砕していく任務があるのだ。だからこそ、より広範な、より高度な作戦展開へむけた我がの呼びかけがあるわけだ。

問 サイダのパレスチナ難民キャンプの状況は、現在どうか？
ペイルートのキャンプ戦争の二の舞は、ないだろうか？
答 我々は、レバノンの民族的決定

現しますか？

答 レバノンが通過しつつある現在の段階は、これまでになく、デリケートで危険な段階だ。とりわけ、いがかわしい試みとして東ベイルートで起こった流血の武力政変以後。これは、一年間の苛酷な訓練に終止符を打つための基本的かつ重要な門口を制定した三者合意をぶち壊すことを狙いとしている。

一方、合意の規定とその署名者達は以下のことを立証した。つまり、闘いはイスラム教徒とクリスチャンの間の宗派闘争ではなく、一方の、レバノンの平和と統一達成のために働いている多数派イスラム教徒、クリスチャンと、他方の、レバノンの破壊と分割のために働いている少数派イスラム教徒、クリスチャンとの間の闘いであるという事。現在の闘いは、アラブ主義と民主主義を基礎にしたレバノンの統一を信ずる正直な民族主義者と、シオニスト化、独裁を基礎にしたレバノンの分割を信ずる孤立主義者との間の闘いである。

三者合意調印以後のレバノンにおける闘いは、もはや宗派闘争である共同休戦の闘いではないということ。を指摘しておきたい。現在の闘いは、

に従って行動しており、パレスチナの兄弟達も我々と共にその決定に従う責任がある。我々は、八二年以前の状態にはもどらないと決めている。パレスチナの兄弟達は、この決定を守って、我々との同盟を結んでいる。

サイダの人民対パレスチナの兄弟達との戦闘を回避させようとして、彼らと接触し、神の加護があったおかげで、流血回避に成功している。片やPLO議長のアラフ・アラフは、数人の分子を活性化して事を荒立てようとして期待しているかもしれないが、サイダーパレスチナ同盟の破壊は失敗するだろうと我々は確信している。

問 イスラエル空軍のレバノン領空侵犯は、シリヤーイスラエル軍事対決になるだろうか？

答 イスラエルは、強力な軍事力の全力量をかけてレバノンを侵略したが、人間爆弾の波状攻撃を受けて、敗北させられている。そんな抵抗は、今まで受けた事もないものだった。今や、イスラエルも米も、この種の抵抗にどう対応したものか、対処にまどつている。イスラエルは、イスラエル軍の志気向上、イメージ一新をもくろんでおり、そのために、

一方の平和と統一の主唱者と、他方の戦争と分割の主唱者の間の戦闘である。

問 行き詰り打開の試みの中で、軍事的再燃が全体に拡がると予想しますか？

答 三者合意の調印後、東ベイルートで起こったことの結果として、レバノンは急性の危機に直面している。しかしながら、東ベイルートの武力政変を華々しく演じたファシスト達は危機の延長を主張し、レバノンの現在の行き詰りを導いた。我々は、合法的だろうと非合法的だろうと、あらゆる方法を用いて、緊急にこの行き詰りを打開しよう動かなくてはならない。なぜなら我々は、この渦の中にじっとしているべきではないし、またできない。……我々はレバノン人として、この行き詰りを打開する行動を開始しなければならぬ。

……指導者として、我々は現在の行き詰りを切り抜けるために、政治的運動を開始してきた。だが、肯定的な結果を創り出すのに失敗したら、我々は、軍事的手段に訴えるだろう。したがって、包括的軍事再燃は、もし我々が政治的・平和的な方法で、

電撃的、かつ短期の戦闘をやるようにしている。戦場をどこにするか、奴らは、ここに注意を払っている。最近のシリヤーホルダン和解を流産させるために、シリヤ、ホルダン、またはイエメンを攻撃対象としているかもしれない。もっとも、イスラエルは、最新兵器で軍事力を増したシリヤに戦争をしかけるのを躊躇しているが。

問 キリスト教徒内で三者合意擁護派と反対派の対峙があるが、これが引金となって、東ベイルートで戦闘になるだろうか？

答 東西、いずれのベイルートでもどんな戦闘も起こしてほしくないし、あらゆる努力はこの合意の支持、実施に集中してほしいものだ。が、東ベイルート内の抗争は、権力・権威をめぐったものだ。なぜなら、東ベイルートの全リーダー連中は、この合意がレバノンの利益になるものである事、これをよく承知しているからだ。レバノンの存亡、これが危機に瀕している。レバノンが統一国家として存続するのか、それとも、イスラエルも米もくろむような小国家群の複合体でしかなくなるのか、これが核心なのだ。

この袋小路を打開するに失敗したら、いつでも起こり得る。

問 レバノンをこの危険な行き詰りに導いた責任は誰にありますか？

答 カミーユ・シャムーンとアントワヌ・ラハドの二人組と並んで、今やイスラエルの手先を代表している二人組——アミン・ジェマイエル、大統領とサミール・ジャジャに、今日のレバノンの苦悩をもたらした危険な行き詰りの責任がある。この四人が三者合意を攻撃し、平和への機会を破壊した奴らだ。この四人は、レバノンの危機を終わらせることに関心がなく、彼らが国家財源から不正利得した、彼らの収入と富を守るために、孤立して国と人民に敵対している。

問 現段階で採用されるスローガンは、ジェマイエル大統領の放逐を強いることのように見えますが、この目的は政治的方法で達成できると考えますか？

答 レバノン人の平和合意であり、レバノンの統一と民主的発展をめざしている三者合意の第一の敵として、アミン・ジェマイエルは残存している。合意は、レバノン人の危機を克服

ともかく、東ベイルートでの抗争は、合意実施の足を引っ張るが、合意の実施を見合わせるというわけにはいかない。これ以外に解決の道がない、これが誰にも明らかであるから。我々は、この血なまぐさい戦闘を終結させ、一日も早く三者合意を実施しよう、呼びかける。また、シリヤおよびシリヤ大統領の支援を得て、この合意が実施されていくものと確信している。

問 新政府樹立をいつ頃と考えるか？

答 きわめて近いうちだろう。

問 ナビーハ・ベリ大臣との関係は？

答 我々は同盟しており、関係は良好である。

資料⑤
シリヤ系アラブ・バース党、レバノン支部長、アーセム・カンソー氏とのインタビュー
「東ベイルートの流血の武力政変はジェマイエルによって計画され、ジャジャによって遂行された」
「行き詰り打開のため軍事的再燃があるだろう」

問 現在のレバノンの状況をどう表

服する彼らの希望なので、レバノン人はこの合意を妨害する何者とも闘うであろう。今後、レバノン人によるアミン・ジェマイエルポイコットの呼びかけがあり、その後、合意の条文を履行するため、彼を退職させる呼びかけがあるだろう。

この基礎の上に、レバノンのアラブ主義、独立、主権、そして民主的発展を信じるすべての指導者は、大統領の放逐を強いるための政治的運動に着手している。すでに話したように、もし政治的方法がジェマイエル失脚に失敗したら、この目的を達成する他の方法がある。

問 新しい大統領選挙のための準備がされているというのは本当ですか？ また、誰をジェマイエルの後任として指名しますか？

答 大統領の放逐を強いる闘いは、幾人かの有力な指導者によって着手された運動の中で示されたように、政治的に開始された。これらの動きは、大統領の即時退陣を要求しているすべての地区を包括しながら、毎日強化されている。憲法上の処置もふくめて、のちほど、国会を通してとられるいくつかの政治的手続きがある。それが、大統領の退陣要求に

顕著な役割を果たすはずだ。... ジェマイエルの後継者に大差はない。彼が、三者合意の条文を適用するために働くのであれば、我々は、どんな大統領でも支援する。

問 三者合意の履行を妨害したのは誰だと考えますか？ また、ジェマイエル大統領は、東ベイルートの、合意に反対する武力政変と何らかの関連があったのでしょうか？

答 ... アメリカとイスラエルにその誘われて、アミン・ジェマイエルは、合意を流軋の武力政変で攻撃した。それは、東ベイルートの多くの人々の死を招いた。人々がアラブであることを選択し、平和に暮らしたいと望んだというだけの理由で。

問 ジェマイエルは、昨日の敵・ジェマイエル党(ファランジ党)への反乱の英雄である、ジャジャと手を組んだ。合意に反対し、東ベイルートおよび全国の人民に敵対するこの武力政変は、ジェマイエルによって計画され、ジャジャによって遂行されたといえる。

問 合意の改正は可能なのか？ また、結局のところ、合意は履行されるのでしょうか？

答 三者合意は、レバノンの危機を終らせる最小限合意なので、それ自体変えたり、改良したりする可能性はない。この三者合意は、レバノンの統一とアラブ主義と民主的発展を信じるイスラム教徒とクリスチャンによって、厳格に実行されるように徹底的に検討された。なぜなら、合意は、正直なレバノン人の願望を反映する、国民的な解決を代表しているからである。したがって、合意の改正は全くありえない。私は、合意が履行されると断言できる。なぜなら、最近レバノン人の大多数の態度によって明確にされたように、それに代るものがないのであるから。

問 シリアはレバニーズ・フォーンズおよびサミール・ジャジャと交渉すると考えますか？

答 三者合意は、シリアの援助の下で調印された。... シリアは、レバノンの繁栄と安定を求め、すべての人、そして、レバノンのアラブ主義と発展を信じる人に、その手を差し伸べている。... しかし、シリアにとって、イスラエルの手先との対話に入ることは不可能である。シリアはアラブであることを選んだ者とのみ交渉する。サミール・ジャジャの

選択は何か？ ジャジャー・ジェマイエル同盟は、過渡的で短命であろう。我々は、間もなく、双方がお互いに殺し合う虐殺について見聞きすることになる。

シリアは、レバノン危機の包括的・国民的解決を制定した三者合意の条文的履行を助けようとする、正直なイスラム教徒およびクリスチャンすべての味方であり、合意に反対する者、誰よりもジェマイエルとジャジャをボイコットするだろう。

問 ジェマイエル政権に反対する勢力への圧力の一段として、パレスチナ人とアマル民兵の間にキャンプ戦争が勃発するという恐れが大きくなっていますが、これらの恐れは正しくないのでしょうか？

答 三者合意調印(一月二八日)の前、我々は、多くの合意に参加していない者が合意を破棄しようとするのではないかと恐れた。アメリカ、イスラエルおよびその手下どもが、合意の破滅に動くだろうということ、我々はよく知っていた。PLO議長、ヤセル・アラファトとジェマイエルが、合意反対に動くことも、よくわかってきた。合意に反対するアラファトとジェマイエルの利害の

一致ゆえに、ベイルートのキャンプ戦争を再燃させようとする、アラファトの破壊的で絶望的な試みがある。アラファトはまた、サイダのパレスチナ人キャンプ、アイネ・ヘルワでの闘いを煽動する新しい試みを行うだろう。しかしながら、レバノンの民族主義指導者、パレスチナ民族救済戦線(PNSF)および、キャンプの調整委員会の自覚と注意のおかげで、衝突はすみやかに抑制されつつある。

アラファトのいかげわしい計画に対処し、すべてのエージェント(レバノンに現在の渦中にとどめようとしているアミン・ジェマイエルの計画に役立つために、キャンプ戦争を焚きつけるようにあらゆる手段を使っている)の侵入を防ぐ予防措置がとられている。

危機を終らせることを主眼とするダマス合意を履行しようとする人民の決意ゆえに、アラファトその他の隊を分裂させ、三者合意をおち壊そうとする試みは、失敗するよう運命づけられていると言える。

問 最近のレバノンの進展およびジェマイエル大統領に対するシリアの態度を要約できますか？

答 ... シリアは東ベイルートで起こった流血および平和合意攻撃に満足できなかった。レバノンを救うために、シリアは、この合意を後援し、働いてきたのだから。同様に、シリアは東ベイルートで武力政変を演じた者および三者合意に反対している者、誰よりもアミン・ジェマイエルに満足していない。

問 政治的宗派主義の破棄に反対しているクリスチャンへのあなたの返答は？ 宗派主義は人民的な支持を受けつつあるように見えますが...

答 三者合意は、レバノンの危機を終らせるための主要な門口として生き続けている。合意は、結果として、政治的宗派主義の破棄へと導かれるだろう。それは、レバノンの大多数のイスラム教徒とクリスチャンの国民的で広い要求だから。

しかし、宗派のプリンス達は、政治的宗派主義の廃止に反対し、孤立している。特権を持っている者、および現在の宗派体制から利益を得ているイスラム教徒とクリスチャンもまた、宗派政治の破棄に反対している。

宗派特権維持に人民的な支持があると私は考えない。したがって、私は、

政治的宗派主義排除反対者へ人民的支援はない、と言え。なぜなら、彼らは一年間の不幸のあとで、捨て去られるべき時代遅れの伝統的な概念に、未だ固執している遅れた少数派のみを代表しているのだから。

資料⑥
ヨルダン—イスラエル秘密合意
イスラエルの「アル・ハミシユマル」紙にデヒヤ党指導者が明らかにしたもの
(PFLP機関誌「デモクラティック・パレスタイン」一月号より)

政治的宗派主義排除反対者へ人民的支援はない、と言え。なぜなら、彼らは一年間の不幸のあとで、捨て去られるべき時代遅れの伝統的な概念に、未だ固執している遅れた少数派のみを代表しているのだから。

- 1 イスラエルが被占領地の治安の責任をとる。ヨルダンは警察の責任をとる。
- 2 ヨルダン警察は、アラブ人の村や市で働く。イスラエル警察は、イスラエル人のセトルメントで働く。
- 3 水源は拒否権をもつ両国の共同行政下におかれる。
- 4 ヨルダン川の二つの橋の防衛と監視について、西岸側はイスラエルとヨルダンの責任、ヨルダン側はヨルダンの責任とする。

「選挙と移民凍結」

- 1 西岸のアラブ市民は、ヨルダン議会への投票権を持つ。イスラエル市民は、クネセツトに投票する。
- 2 被占領地内に新しいセトルメントはなく、存在するセトルメントの拡大もない。
- 3 ソ連参加の国際会議招請についての合意がある。イスラエルの前提条件は、ソ連との関係更新である。
- 4 ヨルダンは、国際会議にPLOとシリアが参加することを望む。イスラエルはシリアを認めるが、PLOを認めない。

「エルサレム—未解決の問題」

- 1 エルサレムの資格は未解決に残す。イスラエルはジェベル・アル・ペイト(アル・アクサイラム寺院の敷地)へのヨルダン人の存在を認め、そこにヨルダン旗を掲げることを許可する。
- 2 ヨルダン西岸の固有地は、共同行政下におかれ、双方は拒否権をもつ。
- 3 イスラエルの要求によれば、過渡期は五年間つづくが、ヨルダンはこれを三年に限定することを望んでいる。

資料⑦
DFLP闘争目標
創立十七周年に際して
(「DFLPブレティン」八年一月号より)

政治綱領とパレスチナ人の合意した決議を基礎にする統一したPLO

- (ラバト、バグダッド、フェズの)アラブサミット決議を基礎に、愛国的アラブ勢力および国家と統一したPLOとの関係を正すこと
- ソ連および独立した同等のパートナーとしてのPLOが参加した国際会議
- PLOと、ソ連を筆頭とする社会主義諸国、国際的民族解放運動および資本主義諸国の労働者・民主勢力との間の原則的関係の強化
- PLOの統一にとって主要な障害であるアンマン合意の破棄
- 独立したパレスチナ国家の建設とパレスチナ人民の自決権および祖国帰還の権利
- イスラエルの占領に対する武装闘

争もふくめた闘いの強化

- レバノン内のパレスチナ人の革命参加の権利——キャンプの自主治安のため、基本的人権のため、レバノンの愛国的かつ進歩的勢力との関係強化のため——

資料⑧
日本赤軍声明

二月四日、リビア航空機ハ
イジャックという新たなテ
ロリストイスラエルの攻撃に
ついて、ベカーの日本赤軍
指導部は以下の声明を発表
した。

日本赤軍は、パレスチナ人指導部逮捕を狙ったリビア航空機ハイジャックというイスラエルの国家テロリスト活動を強く非難する。それは、アラブ民族、とくに対決戦線国家のリビア、シリアのような、反帝隊列の中のアラブ民族主義進歩勢力に対する、米帝—イスラエルの弾圧政策の一部である。

この間、一方で、米帝の砲艦戦略は、シドラ湾の第六艦隊および軍事演習拡大によって、リビアの民族主義的立場への挑発と攻撃を試みている。他方で、イスラエル・テロリス

ト軍は、シリアに対する軍事的挑発、被占領パレスチナにおけるパレスチナ人民に対する軍事的弾圧、そして「イスラエルの安全」を口実にした、レバノン人民への鉄拳攻撃を続けている。

中東における米帝—イスラエルによる、これら一連のテロリスト活動は、彼らの「戦略同盟」の性格と「和平交渉」イニシアチブの名のもとにアラブ民族に対する彼らの新たな攻撃段階を明確に示している。

世界中のすべての進歩的民権勢力および国家は、米帝—イスラエルの国家テロリスト活動に対し、反撃すべきである。

世界中のすべての革命勢力は、米帝を筆頭とする帝国主義に対するその活動を強化・促進すべきである。

日本赤軍は、米帝—イスラエルの砲艦政策に対するすべての活動を支援してゆく。

- 米帝—イスラエルの国家テロ粉砕！
- 米帝—イスラエルの「戦略同盟」に対する、進歩的民権主義活動を支援しよう！
- アラブ—パレスチナ解放闘争と共に、革命活動を強化しよう！

一九八六年二月四日
日本赤軍指導部 ベカーにて

激動の中東
ドキュメント

一九八六年一月九日
一月三二日

一月九日(木)

- レバノン
ベイルートでは平穏。
- リビア—米国
①南イエメン大統領アリ・ナセル・ムハマドは、米国の対リビア経済制裁に対し、アラブ側の反米ボイコットを呼びかけた。シリアは「リビアを全面的に支援する」。
- UAEは「レーガンの対リビア声明は宣戦布告である。米製品に対するアラブ・ボイコットを」。ヨルダンはこのような反テロキャンペーンはイスラエルを利するだけである」と、各いっせいに米国批判。
- ②カダフィ、記者会見で、「米国はなおもリビアに対する軍事的攻撃の企てをしている。地中海における米国の軍事プレゼンスをなくするために世界的解放運動の団結が必要である」と語る。

一月一〇日(金)

- レバノン
スレイマン・カタールの暗殺に抗議して一五〇〇人が西ベイルートでデモ行進。
- イスラエル
①イスラエルテレビ、ラジオ局、ストライキ。
- ②パレス、対エジプト関係改善を近く行うと発言。
- シリア
ベカー高原にある対空ミサイル装置を撤去したという、米筋の報道を否定。
- リビア—米国
英国サッチャーは対リビア経済制裁に反対表明。「テロは非合法的手段だが、反テロは合法的にやるべき」と。
- カナダは対リビア経済制裁に同調。伊は、対リビア武器輸出は禁止したが、経済制裁には反対表明。

一月二一日(土)

- レバノン
①ナビーハ・ベリ談「もし、アミン・ジェマイエルが、三者合意に同意せず、その実施に協力しないならば、軍事的攻撃を受けるだろう」
- ②親アミン派の「アル・アマル」紙は、「三者合意は、マロン派共同体を米国のインディアンのような最底辺グループにするよう脅しかけるものである」と非難。
- ③LF主要メンバー、カリム・バクラドウニは、LF司令官ホベイカとLF参謀長サミール・ジャジャの調停を行っている、と語る。
- ④ソ連の駐レバノン代理大使は、国連安保理で、南レバノンでのイスラエルの行為に対する抗議をレバノンが提起すれば、全面的にレバノンを支持・支援する」と表明。
- パレスチナ
ナブルス市の中心区で制服の国境警備兵銃撃され、一名死亡。イスラエル軍は現場を封鎖(PFLPが責任発表、ナブルス市カサブ街は外出禁止令施行される)。
- イスラエル
シャミールのアドバイザーはテロリズム解決の唯一の方法は「テロリスト組織の指導者とブレインの暗殺」と、声明。
- リビア
伊内相、オスカー・スカルファは、リビアに、テロリストのた

めめ訓練キャンプがあると確言。

- イギリス
英外相、ジェフリー・ハウ、五日間の中東歴訪に出発。サウジアラビア、クウェート、オマーンを訪問する予定。
- 一月二二日(日)
レバノン
西ベカー出身国会議員サリム・ダウドの息子ファイサル・ダウドは「アラブ・レバノンの闘争運動」と称する政治組織を結成。
- パレスチナ
①アラファト、カタールで、彼が軍事作戦とロケット砲攻撃をガリリイにあるイスラエル入植地に対して行うことを呼びかけた後のイスラエルの攻撃の可能性を警告した。そしてレバノン内のパレスチナ人キャンプの武装を指導部が決定したと語った。
- ②アラファト、ジェッダで、「イスラエルと米国と対決するために、ムアマル・カダフィ大佐との相違を忘れ、彼と共同する用意がある」と語る。
- イスラエル
ナブルスに夜間外出禁止令。前日、PFLPがイスラエル兵を攻撃、死者一名を出したことから。

オマーン
英外相、オマーン訪問開始(一日まで)。

一月二三日(月)

- レバノン
アミン、ダマスカス訪問。同時にベイルート海岸道路沿いで、キリスト教徒内戦闘一三時間にわたって行われる(LF民兵とファランジスト民兵の間で。LF民兵は常備兵七〇〇〇人と数千人の予備兵をもっている)。LFのジャジャ派部隊(M-48戦車、一五五ミリ砲等を装備し、二〇〇〇人の人員)も東ベイルートの正規軍も未だ戦闘に参加していない。
- 南イエメン
イエメン社会党政治局内で対立。元国防相アリ・アハメッド・ナセル・アンタールとその後継者サラハ・モスレ・カーセムは殺され、元大統領アブデル・ファタッハ・イスマイリは負傷(この事件は大統領アリ・ナセル・ムハマドの企画したものと考えられている)。

一月二四日(火)

- レバノン
①アミン・ジェマイエルはダマスカスでアサドと会談後、レバノンへ帰国(共同声明を出さず)。「会谈は完全に失敗だった」とシリアのカッダム副大統領語る。三者合意の三派代表はカッダムと会談(三派のリーダーは二四時間以内にベイルートで会合をもち「ジェマイエルの三者合意受け入れ拒否に対して、あらゆるレベルで必要な手段をとる」と語る)。
- アミン・ジェマイエルの合意反対の理由は以下。
 - 政治宗派制度の廃止
 - 大統領特権の縮小
 - シリアとの特別の関係(ジェマイエルはこの問題を取り扱う政府を望んだ)
 - 議会における同数の代表者数
 - 閣僚指名の原則とその増加
- ②ジェマイエル帰国後、軍は東ベイルート地区を統轄、主要な交差点に戦車等が配備される。
- ③レバノン紙「アッサフィール」は、ダニー・シャムーンの国民自由党は、先週五〇〇〇人の部隊を海路で南レバノンに送り、SLA部隊を強化すると同時に、うち五〇〇人はイスラエルに送られ、特殊訓練を受け、後に東ベイルートにもどり「三者合意支持キリスト教徒の暗殺にたずさわると伝えて」。
- イスラエル
①イスラエル特使キンチ、ギリシャ

外務省との会談後、「(両国の)対話強化に合意した」と語る。ギリシャ側はコメントなし。

②イスラエル国会議員、アル・アクサイラム寺院の中に入る。反対デモを行った七人のパレスチナ人は逮捕される。

・南イエメン
大統領派と叛乱派の間で、大砲、砲艦、戦車、戦闘機を使った闘い続く。

・エジプト
伊首相ベテノ・クラクシ、カイロで、ムバラク大統領と地中海情勢について討議。

・リビア
伊首相ベテノ・クラクシは、リビアがアブ・ニダルを支援しているとは非難。

一月十五日(水)
・レバノン

①LFのホベイカ部隊に対して明け方から、LFジャジャ部隊とファランジ党民兵部隊が共同して急襲。午後には、ホベイカ部隊本部などが包囲され、ホベイカとその側近は国防省へ逃れる。

②メトン高地にいた左派民兵勢力は、ビクファヤ方面に進撃していると報道されている。

③パトルーンとジュベイル地区で、民族勢力(SSNP、LCP、シリア・パース党、フランジエ民兵)が、LFの陣地へ朝がけ攻撃。

④ファランジ党は、シリアとの特別の関係を呼びかけるコミュニケ発表。

・南イエメン
内戦激化、混乱状態。

①アラブ・アフリカ共同議員会議終了。アラブ連盟とアフリカ統一機構(OAU)はさらなる共同強化に合意。

②ダマスカスラジオは「ワシントンでは、レバノンからのイスラエル撤退要求決議に拒否権を發動したゆえ、アラブと平和の敵である」と報道。

・エジプト
米参謀総長、ウィリアム・クロウはイスラエルからカイロ着。三日間滞在し、国防相、アブデル・ハリム・アブ・ガザラと会談する。

ユダヤ人記者世界大会開催(1・18〜21)。米国内の新保守派の結集。

・南イエメン
①ソ連大使館で行われている調停うまくいかず、ソ連はソ連市民の撤退を開始。

②シリアは、南イエメンに対し、即内戦停止を呼びかける。

③外国人は、英、ソ、仏の戦艦で脱出開始。

一月十九日(日)
・レバノン

①キリスト教徒民兵幹部に対し、シ

③「ベカーのザハレ戦線」を結成(親シリアキリスト教徒。イスラエルに対する抵抗戦支持。ベカーでの社会経済問題の解決)。

・シリア
アラブ・アフリカ共同議員会議開催。

・イラク
イラク軍事スポークスマンは、イランのカグ島を空爆したと発表。

一月十六日(木)
・レバノン

①ホベイカは、自家用機でベイルートからキプロスへ逃れる(この間のキリスト教徒内戦で四三〇人死亡、六二五人負傷と報道)。

②ビクファヤを見下す丘に陣取ったシリア・パース党レバノン支部部隊は、待期中。左派側はアミン・ジュマイエル攻撃の陣型を取り始めている。

③パトルーンとジュベイル地区で、民族勢力(SSNP、LCP、シリア・パース党、フランジエ民兵)が、LFの陣地へ朝がけ攻撃。

④ファランジ党は、シリアとの特別の関係を呼びかけるコミュニケ発表。

・南イエメン
内戦激化、混乱状態。

ジャジャ演説「今日をもって、全キリスト教徒軍事勢力は、LFに統合される。どんな独自部隊も許さず、対立も許されない」

②ベイルート周辺、メトン地区、スーク・アル・ガルブ地区、東西ベイルート境界線は緊張がつづいている。ビクファヤ近辺に砲撃つづけられている。

③カタイエブ指導者、エリ・カラマは「一月十五日の事件は東部をコントロールした警察国家に対する革命であり、三者合意あるいはダマスカスの第一回サミット(アサド大統領とジュマイエル他他閣僚の会議)に何ら関係ない」と発表。

・パレスチナ
エルサレムで二八台目のバス焼打ちにあう。

・イスラエル
①ペレス、オランダのハーグで、スペインのゴンザレスと会合。米特使マーフィーとも秘密会談。

②エル・アル航空、特別待遇を要求し、英国と対立。マンチェスター空港への着陸停止。

③予算配分をめぐる労働党とリクード党対立、リクードは西岸入植により投資すべきと要求。

④右翼カハ運動、アル・アクサイス

ラム寺院へ実力突入を試み。

・南イエメン
①アデン放送「アリ・ナセル派」の敗北を宣言。「党政治局内の正しい指導部打倒をめざして、アリ・ナセル派がクーデターを狙ったことに問題の発端がある」

②北イエメン大統領サラハ、アラファトに対して南イエメン内戦の調停介入を要請。

・エジプト
トルコ大統領エブレンとムバラク、カイロで会談(両国間の貿易高は七九年の一九〇〇万ドルから、八五年一億五〇〇〇万ドルに増加している)。

・リビア
あるアテネ紙、リビアはギリシャにある米軍基地を攻撃するかもしれない、と報道。

一月二十日(月)
・レバノン

①ダマスカスから帰ったカラミ首相は、政治改革の必要性を語る。

②キリスト教徒民兵指導者達は、マロン派教会の下で、幅広いキリスト教徒連合を形成し、マロン派共同体内の決議機関となることを呼びかける。

③メトン戦線、とりわけドゥアールを、シリア軍が強化、十数台の戦車が見られたと報道された。

④ダマスカスからもどったサリーム・ホス教育相は、ジュマイエル大統領をこきおろし、今後、政府ポイコットに参加すると宣言。

・イスラエル
①ペレス、オランダのハーグで米特使マーフィーと会合。夕食会で「ヨルダン、パレスチナ人と真面目な交渉を望む。(交渉における)未解決問題は大きな支障ではない。交渉を進めたい」と発言。

②ペレス、フセイン王と「パレスチナ人民」との交渉が進行中であると発表。

③ダヴィッド・レビ、旧ユダヤ人地区が再建される。そこへの帰還はユダヤ人民の聖なる義務であると宣言。

・南イエメン
徐々に正常化にむかう。

一月二十一日(火)
・レバノン

①南レバノンでレバノン民族抵抗戦線、SLA・イスラエル軍に対する五つの作戦展開(ヤタル丘等で)。

②東ベイルートのファランジ党事務所近くで車に仕掛けられた爆

⑤ワリド・ジュンブラットは、政府を攻撃し、「政府と共同する者は裏切者」と語る。

・イスラエル
スペイン、イスラエルと国交樹立。スペイン政府は、以下の声明発表。「①アラブ諸国とは緊密な関係を保つ。②一九六七年のアラブ領土の占領を認めない。」

・南イエメン
内戦激化さらに激しく、外国人の脱出作戦進行中。

・国連
安保理で、イスラエルのレバノンからの撤退を求める決議に対し、米国は拒否権発動。

一月十八日(土)
・レバノン

①アミン・ジュマイエルの拠点ビクファヤをイスラム勢力が攻撃中。

②ダマスカスで会合していたジュンブラットとナビーハ・ベリは、アミン・ジュマイエルの大統領辞任を要求。「ジュマイエルが存在している限りいかなる解決もありえない」(ベリ談)

③カラミ首相「シリアは軍事的介入をしないだろう」

④「黒い旗」という組織が、三人のスペイン大使館員の処刑を警告。

・クウェート
ソ連国防相補佐官、ウラジミール・ゴボロフ、六日間の滞在を終了。

・リビア
ムアマル・カダフィ、レーガン大統領を、「第二のヒットラー」と呼び、米国へ決死隊を送ると威嚇。

一月十七日(金)
・レバノン

①アミン・ジュマイエルの拠点ビクファヤに親シリア派民兵砲撃、軍は戦車砲で親シリア派陣地に撃ち返す。LF幹部は会合。ジャジャは「レバノンの危機の国民的解決をシリアの援助で行う」として、イスラム民兵と左派勢力に交渉を呼びかける。

②シリアは、ホベイカの敗走についてノーコメント。ダマスカスではジュンブラットとナビーハ・ベリは会合を続けている。

③在レバノンスペイン大使館員三人、ベイルート空港付近で誘拐される。彼らの釈放とひきかえにスペインに捕まっている二人のレバノン人の釈放を要求。

④西独のナチ・ハンター、ベテ・クラスフェルトは誘拐されているユダヤ人釈放努力のためにベイルート到着。

①アミン・ジュマイエルの拠点ビクファヤをイスラム勢力が攻撃中。

②ダマスカスで会合していたジュンブラットとナビーハ・ベリは、アミン・ジュマイエルの大統領辞任を要求。「ジュマイエルが存在している限りいかなる解決もありえない」(ベリ談)

③カラミ首相「シリアは軍事的介入をしないだろう」

④「黒い旗」という組織が、三人のスペイン大使館員の処刑を警告。

⑤ワリド・ジュンブラットは、政府を攻撃し、「政府と共同する者は裏切者」と語る。

・イスラエル
スペイン、イスラエルと国交樹立。スペイン政府は、以下の声明発表。「①アラブ諸国とは緊密な関係を保つ。②一九六七年のアラブ領土の占領を認めない。」

・南イエメン
内戦激化さらに激しく、外国人の脱出作戦進行中。

・国連
安保理で、イスラエルのレバノンからの撤退を求める決議に対し、米国は拒否権発動。

一月十八日(土)
・レバノン

弾爆破。三〇人死亡、一三二人負傷と伝えられている。

③サイダで、PNDリーダー、ムスタファ・サード氏暗殺未遂一周年抗議デモとストライキ。

④レバノンNUFメンバー、リビア訪問。リビアの対米政策支持表明。

イスラエル
ペレス、訪英。米国リチャード・マーフィーと中断していた「中東和平」の動きを再開させる話し合いをするため。

②南イエメン
内戦再燃のため外国人脱出の三つの試み失敗。

①「タバ問題調停終了後、イスラエルと他の関係を進展させるべき」と議会決議。

②米参謀総長、カイロ発。
③ムバラク、アラブ諸国に、「違いを忘れ」中東の現状の重大さに気づくべき」と呼びかけた。

一月二二日(水)
●レバノン
①アミンの拠点、ビクファヤを見下す戦略地点に、右派民兵移動。

②前LF司令官ホベイカ、ダマスカスへ。
③米国はアミン・ジェマイエルを大

統領として支えることを表明。
④PSPのジュンブラット「アミン・ジェマイエルが平和合意を拒否したため、これまでにない内戦になるだろう」と談。

イスラエル
南レバノンでイスラエル兵が国連軍のアイランド兵に発砲。アイランド外相は、同国隊の撤退を考慮中と語る。

②南イエメン
①大統領と叛乱軍の戦車戦、砲撃戦はアデンの空港付近で続いている。しかし、叛乱軍はほぼアデン市全域を押えている。

②英、仏、ソの船で外国人二二〇〇人脱出。

一月二三日(木)
●レバノン
①ホベイカ、ミシェル・サマハ、ダマスカスでカッダムと会談。ジェマイエル大統領に反対するクリスチャン・イスラム戦線形成を討議。

②フランジェは、土曜日のマロン派大会に不参加を表明。

③メトンとスーク・アル・ガルブで、一日中激戦。
④イスラエル
①ペレス、ロンドンで米国TV局インタビューに答えて、米国特使マ

ーフィーの仲介でヨルダンのフセインとの直接和平交渉にむけてわざと進展のあったこと、PLOの交渉参加の条件は、PLOが「テロリズム」を放棄すること、イスラエルの生存権を認め、イスラエルとの直接交渉に応じることであるという。ペレスはまた、西岸ガザのパレスチナ指導者にフセインの和平努力に協力することと呼びかけた。

②エルサレムのイスラム委員会はマラケシでの特別会議後、イスラム諸国に、エルサレムと被占領地の解放まで「あらゆる方法で聖戦を追求しよう」と訴えた。

●南イエメン
叛乱派優勢、しかし大統領派に忠誠を誓うアビヤン地方の部族がアデン攻撃を企てているとの報道。

●ヨルダン
フセイン王は、国連総長補佐、ブリヤン・ウルクハルトと会い、中東に関する国際会議について討議。

●イラク
イラクは、イランのカグ島に給油しているポンプステーションを爆撃したと発表。

一月二四日(金)
●レバノン

①アミン・ジェマイエルの地元ビクファヤでキリスト教徒右派民兵と親シリア民兵間で戦車戦。バーブダの大統領官邸近くではドルーズ民兵と軍との砲撃戦。

②サミール・ジャジャ、LFの新リーダーとして発表される。新執行委は、「三者合意の精神」を支持すると声明。

③国連事務次長、ブリヤン・ウルクハルト、エルサレムからナクウラを視察、UNIFIL将校と会談。アマルの地区代表とも会談。

●パレスチナ
イスラエルは、ガリリー作戦で釈放された、四人のPFLPメンバーを国外追放した。

イスラエル
訪英中のペレス、イスラエルとヨルダンの間接接触に進展があった。PLOと交渉しないこと、エルサレムは東西ともイスラエルの首都であることに変わりないことを記者会見で表明。

●南イエメン
反乱派側公式に権力奪取。臨時国家主席として、首相アブ・バカル・アッタースを指名。イエメン社会党はアリ・ナセル・ムハマドの全役職を剝奪し、裁判にかけるこ

とを決定。一万人が死亡したと見られている。

●リビア
①米ブッシュ副大統領、カダフィが昨年一二月の空港攻撃に関与していたと非難。

②米第六艦隊の「コラルシー」、「サラトガ」から飛びたった戦闘機が演習開始。

③カダフィ、警戒体制。
一月二五日(土)
●レバノン

①ブキルキでマロン派キリスト教徒大会合、シャムーンは「シリアとの合意を我々は望む。対話を望む。私は軍事的対決に反対する」と語る。マロン派合意は「三者合意を支持し、戦争の終結と政治改革、レバノン・シリアの特殊な関係を目的とするシリアの努力を歓迎する」という声明を発表。この会合には二人の元大統領、一八人の国会議員、一三人の牧師が参加。

②LF新司令官ジャジャ、シリアとの対話の用意のあることを示唆。ただし、かつての「三者合意」は修正が必要であり、ホベイカと共同するつもりのないことを表明した。

③国連平和維持軍(UNIFIL)

のネパール兵と村民の婦人一人が南部レバノン、カフラ村でSLAの砲撃で死亡。他にも七人の村民が負傷。

④南部で、UNIFIL特使を伴った国連特使ブリヤン・ウルクハルトは、アマル代表ダワード・ダワードと会った。

●ヨルダン
アラファトらPLO幹部アンマン到着。

●リビア
カダフィ大佐は、米国の軍事演習に対し、国家緊急体制を軍に指令。新国家元首アッタース、モスクワから帰国。

一月二六日(日)
●レバノン

①アミン・ジェマイエルの閣議招集要請をカラミ首相拒否。ジェマイエルは三者合意を議会で討議すると表明。

②ホベイカ、東レバノンのザハレを訪問、クリスチャン指導者と会談。

●イスラエル
①ペレス、西独訪問開始。

②イスラエル国務相ワイツマン、エジプト訪問開始。ペレスームバラク会談の可能性について検討。

●南イエメン
アッタース首相、アデンにもどり、暫定国家元首に。アデン市は叛乱側に制圧され、徐々に正常化にむかっている。一三日以来、初の閣議。

●リビア
カダフィ大佐は、「もし、米がリビアを攻撃したら、リビアは地中海の米軍基地を攻撃する」と警告。

●サウジアラビア
仏元首相レイモン・バルル、リヤドでファハド国王と会見。

一月二七日(月)
●レバノン

①イスラエルは、UNIFIL(南レバノン駐留国連軍)のレバノン内のイスラエル「セキユリティゾーン」での展開を拒否(セキユリティゾーン内には約一〇〇〇人のイスラエル兵が、イスラエルの手先SLA(南レバノン軍)とともに残留している)。

②南レバノン、ナバティエ地区クフアル・ルマンでレバノン民族抵抗運動とSLA戦闘。

③アミン・ジェマイエルの閣議招集に集まったのは九人のうち三人のみ(シャムーン、ジョセフ・ハーシム、ビクトール・カシル)。国

会議長、フセイン・フセインは、国会で三者合意を討議するのを拒否。

●パレスチナ
アラファト、アンマンで、二人の米高官と話したあとで、現行の平和交渉を「凍結」と語った。

●南イエメン
①外相は、アデン駐在クウェート大使と会談。アラブ諸国との関係改善を続けることを表明。今回の内戦で、死者は一万人以上にのぼると報道されている。

②臨時大統領は、ソ連との関係を維持する決意を確認。

●イラン
イラクの村を爆撃、市民六人死亡。

一月二八日(火)
●レバノン

①ペイルト、グリーンライン沿いおよびスーク・アル・ガルブで戦闘。

②フランジェ、アミンに即時大統領職を辞任要求。

③ペイルト、サブラ・シャティールキャンプで、アマルとパレスチナ勢力戦闘(二時間)。三人死亡。

①アンマンで、PLOとヨルダン会談。「進展なし」とイスラエル放

送報道。

② 国連安保理、エルサレムでのイスラエルの行為非難、討議。

③ アブ・イヤード、「国連決議二四二と三三八をヨルダンとの間でPLOが認めた」という報道を否定。

イスラエル

ペレス、西独コールと会談。

・南イエメン

米国は南イエメン新政権を認めずと表明。

・リビア

リビア、カダフィ大佐と、アルジェリアのベンジャディド大統領、国境で会合、両国関係を討議。

・エジプト

ムバラク大統領は、ヨーロッパにむけて中東における平和探求に、「活動的で影響ある役割」を演じるように呼びかけた。

・イラク

軍事スポークスマンは、石油タンカーを空襲したと報告。

・国際

「チャレンジャー」打ち上げ失敗。

一月二九日(水)

・レバノン

① イスラエル機、南レバノン、サイダ市のミエミエキャンプとアイネ・ヘルワキャンプを空爆。四人死

亡、六人負傷。南レバノンでは他に、砲撃をイスラエル、S L A が続けている。

② ホベイカ、「私はジェマイエルの大統領辞任要求において、フランスと完全に一致し、連帯することを宣言する」

③ ジュンブラット、「戦闘は始まったところだ。唯一の解決方法は軍事解決」と語る。

④ サブラ・シャティールで戦闘。

・パレスチナ

① ヨルダン軍兵士一名がヨルダン川をわたり、西岸で二人のイスラエル兵を射殺後、射殺される。

② アラファトとヨルダン首相、ゼイド・リファアトは現行の平和交渉について討議。

・イスラエル

ペレス、一日間の西欧旅行を西ベルリンで終了。晩餐会で、ペレスはソ連に対して、ユダヤ人の「イスラエル」への出国を増やすことを要求。

一月三〇日(木)

・レバノン

① 大統領の辞任を要求して大統領官邸にイスラム民兵、砲撃。ファランジ党は、「大統領辞任は問題外」。

② 火曜日からはまったべイルート南

郊外のサブラ・シャティールキャンプでのアマルとパレスチナ勢力との戦闘つづく。七人のパレスチナ人と三人のアマル民兵がすでに死亡と伝えられている。

・パレスチナ

アブ・ニダール派、西岸とエルサレム地区で三人のイスラエル人を待ち伏せ攻撃し、殺したことの責任を発表。

・リビア

① 米第六艦隊は、軍事演習を終え、リビア沖を離れた。

② 在伊ソ連大使、「ムアマル・カダフィはテロリストではない」と声明。

・米帝

イスラムの聖地におけるユダヤ人の挑発を嘆いた、イスラム諸国による決議に米帝は拒否権発動。

一月三一日(金)

・レバノン

① ベイルートで韓国大使館、二等書記官誘拐される。

② マロン派、ダマス訪問準備会議。

③ アマルとPN SFはシャティールキャンプの停戦合意に到達(二九日からの戦闘で二人死亡)。

・イスラエル

① 西岸からさらに三人のパレスチナ

人追放される。

② レバノン南部、レジスタンスへの援助を防ぐため、イスラエル機はサイダとパレスチナ人キャンプに、小冊子を落下。

・エジプト

ムバラクは、ボンで、不十分ながらECの最近の中東和平努力への参加に勇気づけられている、と語った。

・アラブ連盟

チュニスで、最近のスペイン・イスラエル国交樹立について遺憾の意を表明。

ウニタ書舗の最新刊ノ

資料・中東レポートⅡ

JRA・重信房子編

四六判 261ページ 2500円